



北上の美術 覚え書き

北上に画廊が誕生したのは、戦後間もなくのことです。それまでは、田島屋薬局（本通り）のショーウインドーの中に及川文吾らの作品が飾られ、高校生の私は絵が替わるのを楽しみにしていたものです。その後薬局の2階に田島屋画廊ができ、いろいろな展覧会が見られるようになりました。同じ頃、高与家具店（新穀町）の2階にも家具展示場の一角に画廊ができました。後に何回かの模様替えを経て北上画廊となります。地元だけでなく、中央の有名な画家の個展なども盛んに催されました。武者小路実篤卒寿記念展、笹岡了一夫妻展、末永胤生油絵展、熊谷権展などが思い出されます。昭和40年代には本通りにセントラル画廊ができて、絵画人口が増え個展やグ



神に 利根山光人

ループ展が多く見られるようになり、多くの画家たちがこれらの画廊のお世話になりました。最近では、文房具店ポイス（九年橋）の2階にもギャラリーができ盛況のようです。

前号で他所から北上に来て活躍した画家を紹介しましたが、川村勇の次に北上にやってきた画家は岩間正男です。岩間正男は沿岸大植の出身で武蔵野美術学校出身、最初は公立学校の教師をしていましたが画家志望やみがたく、教師を辞めて画家として歩みます。昭和28、29年頃に独立美術展でブルー・ブー賞、新人賞を続けて受賞。その大作を盛岡のカワトク画廊に並べて話題を呼びました。

岩間正男が北上に来たのは、彼の作品が奇妙な経路で北上画廊の高橋喜太郎のところにあることがわかったからだということです。昭和39年頃北上に来てみて、風土、民俗芸能が気に入ります。

岩間正男は村崎野にアトリエを建て制作の拠点とし、その後は北上画廊で盛んに作品を発表します。そんな中、私と鈴木克郎が彼の作品を購入したのを縁に、昭和39年に美術集団「鬼」を結成します。斎藤充司、池田次男、八重樫順一、佐藤清美なども入ってきて活動します。岩間正男が中央の新象作家協会の創立会員ということもあって、鬼のメンバーはそろって抽象系の新象展に出品するようになりま。芸術村構想をたてて新聞で騒がれたり、年に2回ほどテーマを決めて作品展を催したりして昭和50年頃まで活動を続けます。しかし時代の変化で抽象画から具象画に転向する者も出てきて、活動は次第に下火になり、いつしか解散してしまいます。岩間正男は村崎野のアトリエから上野町のアトリエに移り、千葉と北上を行き来するようになります。

次に北上に来た画家は利根山光人ですが、そのいきさつについては、この通信で今まで綴ってきた通りです。

また、北上出身で盛岡短大美術工芸科を卒業後、主に東京で活躍した画家もいます。児玉晃は在学中に岩手芸術祭賞を受賞し、深沢省三、紅子の推薦で日本色彩研究所に入所。自由美術家協会会員、色彩研究の功績で藍綬褒章、勲五等双光旭日章を受章しています。高橋徳美は阿伊染徳美の名で作品を発表、国画会会員となり審査員も務めました。一時イギリスに移住し、中世美術や神話の研究に打ち込み、郷里の信仰を調査してまとめた『わがかくし念仏』を著したことも有名です。

その他、盛岡美術学校の出身者には、一関で新象展に出品し続けた木村明男、花巻で制作に励み、美術の芥川賞と言われる安井賞展に入選を続けた池田次男がいます。

次に戦後北上の美術団体の歩みを探ってみたいと思います。「萩の江美術協会」は戦後の荒廃した町を美術文化で復興したという意味で、その功績は大きいと思います。その次に現れたのは「えすかるご」という美術団体です。えすかるごとはかたつむりの意で、ゆつくり歩もうということのようです。会員は八重樫次男、斎藤充司、千葉喜秋など萩の江美術協会の作品を観て育った世代の画家たちです。「えすかるご」は昭和39年頃まで存続していたようです。

異色美術館訪問記

世田谷美術館分館宮本三郎記念美術館

宮本三郎のことは、藤田嗣治や橋本八百二等と共に戦争記録画の大家として以前から知っていた。「山下、パーシバル両司令官会見図」や一連の戦争記録画はアングルやドラクロアの作品に匹敵すると思っていた。

筆者は東京の団体展に出品するようになってから画廊巡りをするようになり、昭和48年頃、三越デパートの画廊で生涯忘れることのできない展覧会に遭遇した。花と裸婦などを油彩で描いた豪華絢爛たる宮本三郎の個展だった。大勢の人々に囲まれ胸にリボンをつけた宮本三郎がまぶしかったのを覚えている。三越デパートの社長岡田茂が宣伝部長の頃に、この宮本三郎の晩年の作品を「円熟の赤の時代」と表現したのは有名な話である。この展覧会を見てすっかり感動してしまい抽象画から具象画に戻る決意を新たにしたものだった。この時の作品が『宮本三郎画集』として発刊されたので早速購入した。分厚いケースに納められた大型の豪華な画集は当時の価格で4万円近く、貧乏教師にとっては大変な出費だった。



ヴィーナスの鞋い 宮本三郎

その後宮本三郎の作品群を見たのは平成4年、金沢で開催された第7回国民文化祭に出品した筆者が、宮本三郎の生地にある小松市立宮本三郎美術館に行った時である。スケッチ、デッサン、油彩画など多くの作品群を見て圧倒されたのを覚えている。宮本三郎の没後、ご遺族が世田谷美術館に膨大な作品を寄贈。これをうけて、世田谷美術館では平成11年に「よみがえる宮本三郎展」を開催。寄贈された作品を広く公開、これもすごい展覧会だった。平成16年、宮本三郎が長い間制作の拠点としていた東京奥沢の地に世田谷美術館分館宮本三郎記念美術館が開館した。2年後の平成18年、とうとう念願の美術館に行くことができた。

東急目黒線で奥沢駅に降り美術館に向かった。案内書には徒歩8分とあったが、実際にはその3倍もかかったような気がする。

美術館は鉄筋コンクリート2階建て、1階には講座やいろいろな制作活動の場があり、2階が作品展示場になっていた。年間を通じて宮本三郎の画業がわかるように展示されていて、おびただしい数の作品に圧倒される。戦前の暗い色調の写真絵画から、戦後の色彩豊かな作品まで、宮本三郎の世界にひたることができる。



演奏者 宮本三郎

明治38年石川県小松市に生まれた宮本三郎は、川端画学校で藤島武二の指導を受け、昭和2年二科展に初入選、以後昭和19年まで出品。昭和8年、東京朝日新聞に菊池寛の小説「三家庭」の挿絵を描く。昭和13年渡欧、ルーブル美術館で模写に励む。昭和17年、戦争記録画制作のため藤田嗣治、小磯良平らと共にマレー半島等南方に渡り、「山下、パーシバル両司令官会見図」を完成、次の年に帝国芸術院賞受賞、昭和22年熊谷守一、田村孝之助らと二紀会を設立、亡くなるまで出品し続ける。昭和49年、腸閉塞で逝去、享年69才だった。

戦後の美術界は抽象画を描かないと画家ではないというような風潮があり、具象画のベテランであった岡田謙三や猪熊弦一郎も抽象表現主義の影響を受け、心情的な世界を表現するようになっていった。しかし、宮本三郎は最後まで写真絵画を貫いたのである。モデルを使っての何百枚ものデッサンを日課にしていたと言われる、写真でロマンを求め続けた宮本三郎の美術館を、ぜひご覧頂きたいと思う。

利根山光人記念美術館専任研究員 高橋 大八

発行 北上市まちづくり部生涯学習文化課
〒024-0061 岩手県北上市大通り1-3-1
Tel 0197-72-8304 Fax 0197-63-3121